

書評

上野登 『世界史の地理的構造』 (八朔社, 2012年)

杉野 罔明*

1. 方法論的検討

本書は、労働様式を基本的視点として、世界史の地理的構造を把握しようとした上野登氏の研究成果をまとめたものである。

もともと、世界史を労働様式という視点から把握するという方法は、生産力が未熟で、社会的諸関係が複雑ではない社会の場合にはある程度まで有効だと思われる。しかし、生産力が発達し、政治、経済、あるいは文化、スポーツなどの上部構造が多面的に展開する社会の発展段階になると、それだけの視点では世界史を把握するという事は困難となる。

そうした限界性があるにも係わらず、氏があえて労働様式を基本視点として設定したのは、それが「自然」(人間労働を含む)という身近で、かつ社会構成の基礎的な要因であり、人類社会に共通する要因として、これをもって世界史を地理学的に把握しようと試みたからである。

ところで、地理学が「地の理を明らかにする」という場合、その「地」には、単に自然的な諸要素だけでなく、社会経済的な諸要素をも含んでいる。まさしく「地域」における自然および社会・人文的諸要素の総体的事象を把握するということになる。もし、地理学が、地域の総体的事象を把握する科学であるとすれば、地理学の研究には、自然科学、社会科学、人文科学という科学体系における全ての研究方法が動員されなければならない。

ここで、自然科学、社会科学、人文科学というのは、自然、社会、社会的意識の法則的解明を目的とする方法論によって区分された理論的な科学体系である。その理論的成果を地理的諸事象の分析に応用することによって、地域の総体的な把握が可能となる。つまり、経済地理学が、経済的現実を記述する地誌学に留まらず、経済的發展過程にも踏み込んだ地誌学として、すなわち世界経済の歴史的・空間的な分析を行う地誌学として登場する場合には、こうした諸科学の理論的成果の援用を必要とするのである。

そこで、改めて表題を見ると、「地理的構造」という言葉の内容が問題となる。もとより、「世界史」という概念についても、その歴史的な成立過程が理論的に問題となるが、ここでは、そ

* 執筆 者：杉野罔明

所属/職位：立命館大学 BKC 社会研究機構社会システム研究所 上席研究員

機関住所：〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1

の問題は措定しておく。

「地理的構造」の「地理的」は地域の総体的現象(事象)であるとすれば、その構造とは、地域的総体的諸事象を「まとめたもの」の「仕組み」という意味になるであろう。だが、「地理的」という表現の中には、「空間的」という別の視野があり、その意味だと、世界史の空間的な把握とも理解しうる。ここに「地理的構造」という概念の内容的な曖昧さが残ることになる。

上記のような方法論的な問題や「地理的」ないし「構造」という範疇の概念的曖昧さを残しながらも、つまり、理論的諸問題を内包しているにも係わらず、世界の歴史的展開を、労働様式の発達やその変化によって空間的に把握しようとする氏の研究意欲については、それなりに理解することができる。

なぜなら、人間と自然との関連を、相互平等に作用するという「交互作用論」のような誤った把握ではなく、人間の自然に対する能動的な活動という視点からこの関係を捉え、その具体的な活動をまさに人間労働の発露として把握し、その意味で「労働様式」を「世界史」の地理的構造に対する分析視点として提起しているからである。

しかしながら、上野氏のこうした視点は、経済地誌学における、鴨沢巖氏の「生産関係」論的視点、小林新氏の「生産様式」論的視点と較べてみると、いかにも視野が狭すぎるように思える。もっとも、生産関係視点や生産様式視点だと、逆に人間社会と自然(地域)との接点が漠然となり、かつ曖昧になるという欠陥があり、その点では労働様式視点は自然との接点を具体的に把握できるという利点をもっていると言えよう。そうは言っても、労働様式だけからの接近方法では、結果的には生産力視点に留まることになり、生産関係¹⁾や生産様式を踏まえた地域分析が出来ないという欠陥をもっていることは既に指摘したとおりである。

2. 初期文明社会の地理的構造の検討

本書の「第二章」は「二期社会の展開」となっており、古代の文明社会は、当時における労働様式から、具体的には「内陸の雨期と乾期をもった傾斜地から発生する」とし、それを「人類史の原風土」として論じている。そして、この章における論理展開は、まさに初期文明社会における労働用具に規定された労働様式の展開として、一定の説得性をもっているように思える。

だが、この「二期社会」という初期文明社会の把握視点だけでは、原始的共同体社会と貢納制社会とが区別されずに混在したままになる。そこで、上野氏は、石器を中心とする「二期社会の起源」から、土器を使用する「二期社会の展開」という生産力の発達を指標とした新しい社会への移行を論理的に展開していくのである。

換言すれば、等しく初期文明社会でありながらも、原始的共同体社会と貢納制社会との間には、私的所有の萌芽形態、階級制度の萌芽形態(総体的奴隷制)、初期国家の生成をめぐる、

質的な差異があるという点の認識が見られるが、その差異をまさに労働様式の発達から説明するのである。これを単純化して言えば、石器時代から土器社会への発達を生産力視点から空間的に展開するのである。ただし、農耕の発達により、余剰生産物を合目的に確保できる可能性を生み出すこと、その余剰生産物を貯蔵する手段として、土器の発達過程を把握するという視点が、上野氏の場合には希薄である。氏は、土器を文化伝播の手段として、あるいは、料理革命という視点から把握するに留まっているように思える。

確かに、本書では、アジア的生産様式という範疇が登場してくるのであるが、それが基礎的共同体の形態的差異として、いわば類型的に把握されるだけで、基礎的共同体（氏族ないし村落共同体）を基盤としながらも、それらの相互関係の上部構造としての種族共同体への展開過程が不明確である。

更に言えば、基礎的共同体の類型化がなされているが、その諸類型を貫徹する一般性の把握、諸類型の歴史的継起性が検討されていない。もはや基礎的共同体だけの論理展開では包摂しえない基礎的共同体の相互関係、そこから成立してくる共同諸団体と上部構造（権力構造）との関係をもった貢納制社会の成立が無視されている。その物質的基盤として、余剰生産物を生み出す農耕の発達が問題とされねばならず、まさにその処理関係との関連で土器の役割を論ずべきであったと思われる。

ここで、「二期社会」を規定している水利や農耕といった労働手段の発達が、初期共同体社会と貢納制社会とでは、関係論的に異なっているのではないかという問題を指摘したのは、その地域的な構造や、その空間的な展開過程も、異なったメカニズムの上で展開しているという視点を欠落させているのではないかということである。この点については、二期社会に続いて、世界システムとしての「帝国システム」という概念を上野氏は導入してくるのである。それが第三章における論理展開の中心的な範疇となる。

第二章での論理展開がもつ問題点を整理すれば、次のようになるであろう。上野氏のように、初期文明社会を、基礎共同体と密接に結びついている労働様式から直接的に展開するのは、原始的共同体社会に対しては、ある程度までは分析可能であるが、貢納制社会が成立するようになれば、共同諸団体と上部構造との関係が基本的な社会関係となり、労働様式もまた、大きく変化してくる。このようになれば、もはや労働様式のみでその空間的構造を論ずることは困難となる。その点の認識が、この第二章では欠けているように思える。

3. 帝国システムについての検討

「帝国システム」とは何か、その点について上野氏は次の二つの文章でもって、簡潔に説明している。

「この帝国システム内の移行過程段階として、ヨーロッパ世界と東アジア世界が位置づけら

れることになる。労働様式をベースとした考察では、非有機的自然と一定の人間の能動的対応という人間と自然の関係は、人間による自然征服の関係論へと転換していく」(92ページ)

「本章は、二期社会の草原的社会文明から森林開発の社会文明への展開として考察される」(92～93ページ)

確かに説明は簡潔である。だが、それだけに、「帝国システム」という概念の具体的な規定が明確ではなく、しかも叙述されている内容は極めて曖昧である。

もともと、「帝国」という概念は、他の国家や民族を支配し、属領化している国家のことである。つまり、帝国という概念は、国内的諸関係による規定ではなく、国外の属領との対外的な諸関係によって規定されるものである。

次に、「システム」という概念は、一般的には生産力的な概念であり、したがって、「帝国システム」という範疇(用語)の概念もまた、一つの生産力的概念となる。敢えて、この用語の概念を理解するとすれば、それは属領からの収奪を、関係としてではなく、一つの生産力的なシステムとして把握するということになるだろう。

誤解を厭わずに極言すれば、上野氏の場合には、労働様式をベースとして理解するので、属領からの支配・収奪もまた、一つの生産システムとして論理展開しようと意図したものであろう。

だが、氏による「帝国システム」の説明では、人間の自然に対する関係として「征服」を問題にし、かつ、その内容も森林開発というように限定された内容となっている。

つまり、上野氏の「帝国システム」という概念は、支配的国家と属領との関係ではなく、抽象的な「人間」の自然に対する征服という労働様式として規定するのである。

もともと、人間による自然への働きかけは、労働過程であり、「関係」ではない。これが「関係論」として展開されるのは、労働主体としての人間と、労働対象である自然を所有している者との間においてである。抽象的な「自然」という概念では、生産手段の所有関係を指定しているので、「人間と自然との関係」という場合の「関係」は、国語としての「関係」であり、社会科学が研究対象とする「関係」概念とは異なるものである。

ただし、上野氏が「帝国システム」を、いわば自然に対する技術的克服過程を擬制的に「征服」とし、これを支配関係と表現したとすれば、それなりに理解することはできる。ただし、少なくとも社会科学の方法論からみれば、「帝国」という概念を乱用していると言わねばならない。

なお、上野氏は、この「帝国システム」の典型として、ペルシア、ギリシア、ローマを事例としている。だが、これらの帝国がもっとも活動した時代は、例えばミケーネなどの一部の社会を除いては、すでに奴隷制社会に入っており、そこでは貢納制から奴隷制への転形が問題とされねばならない。すなわち、貢納制と奴隷制とでは、その労働様式に大きな変化がなかったとしても、その余剰生産物を生み出す生産関係、それに規定された分配関係は、私的所有の展開、階級の発生、階級国家の発生によって、社会的にみて質的に異なったものとなっている。つまり、物質的財貨の生産、流通、分配、消費という「経済」の構造が質的に異なっている。

したがって、対自然との関連で、つまり労働様式の差異だけで、空間編成を論ずる「経済地理学」は、生産関係をはじめ分配関係を欠落させた、極めて特殊な性格をもった部分的な学問になってしまう。上野氏による経済地理学の方法論には、そのような側面があることを指摘しておきたい。

4. 四季社会について

本書の第四章は、「四季社会の登場」となっている。すなわち「第四章は、まさに四季的生産力構造の社会が確立される時代の考察ということになる」(123ページ)とされている。

ところが、上野氏のいう「四季社会」なるものの概念が明確ではない。確かに、その内実は「東アジアの灌漑水田農業、ヨーロッパの三圃式農業の展開」(123ページ)という解説があり、それには「五世紀以降、東アジアとヨーロッパ世界の形成が共時的に進行していくが、そこには等質的な生産力の出現があったのではないか」(122ページ)という発想が前提となっている。では、その原因は何か。さらに言えば、東アジアとヨーロッパとの対比だけではなく、世界史的視野からは、中央アジア、さらには南北アメリカとの対比も必要になってくるのではないか。

5. 「四季社会」以降

四季社会以降の論考は、その記述に引用文が多くなり、敢えて暴言すれば、これまでの歴史書から、「都合のよい部分」を借用しているだけという印象である。そのような理論を構築するには、歴史発展の論理的展開が必要だが、事実の併記だけでは、科学性に乏しくなるという欠陥もっている。ただし、上野氏が、このような方法を選んだのは、「等質的な生産力」が形成される前提として、微々たるものとはいえ、東西交易の存在を念頭においていたからではあるまいか。つまり、現代世界をみる限り、交通通信の驚くべき発達により、まさしく上野氏が指摘するような労働様式の画一化が全世界的に拡大し、自然的要因に条件づけられた生産力の地理的構成が形成されつつあると見做すことができるかもしれない。

2012年2月10日 以上

追記

この書評は2012年に私信というかたちで上野登先生へ届けた。返信はあったが、先生からの反論は、これを戴けなかった。おそらく、上野先生の壮大なビジョンを理解するだけの力が私には不足していたからかもしれない。ともかく、最近まで、先生からの反論を心待ちにしていた。

だが、2014年2月、上野登先生は、突如としてご逝去された。先生は九州大学経済学部の先

輩であった。先生には経済地理学の教を乞い、先生は経済地理学会への入会を勧めてくれた。そうした学恩に対して深く感謝している。

先生の学問に対する情熱、そして現実の社会問題に対する行動エネルギーには深く敬服せざるをえない。ネパールの山村に人類史の原点を見出し、あるいは土久呂の公害問題に取り組み、宮崎の地域的发展に貢献した行動実績をもって、先生は彼岸へと旅立たれた。今の私としては、先生のご冥福を祈念しながら、先生のエネルギーを精神的に継承し、遅々としてではあるが、経済学の理論的研究と地域の経済問題に取り組んでいくしかない。

2014年12月10日

註

- 1) 「生産関係」の概念は、「生産に際して取り結ぶ人と人との関係」(ソ連科学アカデミー『経済学教科書』)という規定では、不十分であり、「生産手段の所有関係に規定されながら」という規定条件が必要である。つまり所有論との関連が重視されねばならない。